
最強のNPC共（仮）

アリス法式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強のNPC共（仮）

【Nコード】

N6833Y

【作者名】

アリス法式

【あらすじ】

俺は、勇者で『導き手』で、転生者だ。

なあ女神様、俺チヨット背負っているもの多すぎないか。

この上、『三千年後』の世界と魔王な妹も背負えって言うのか。

しかも、双子なせいで俺（勇者）と妹（魔王）の『存在』が混ざり合ってしまったとか。

この腐れ女神が、俺にどうしろっていうんだ。

といった感じで勇者と魔王の兄妹が世界を救ったりしたりしなかったりするお話です。

あらずじは、悲壮な感じですが、案外子供の身体を満喫している最近の勇者（兄）なのでありました。

勇者と魔王（前書き）

一話一話短めにのんびり更新。

勇者と魔王

「くはははは、そのていどかのう、勇者よ」

何枚も張り巡らされた結界魔法の中心でいかにも魔王、といった姿をした化け物が妙に高い声で高笑いをつづけていた、勇者と呼ばれた少年はボロボロの体でありながら、瀕死状態のなかまをかばうように魔王の前に立ちふさがっている、

「なんじゃ、すでに返事をする気力まで失ってしまったようじゃのう」

「う、うるさい、魔王」

なんとか、声を絞り出したがそれが最後の力であったようで、勇者はそのまま地面に倒れ伏した、

「くそ、ここまでか、だが、覚えておけ魔王、僕が倒れても第二、第三の勇者が……」

「勇者よ、それは、魔王のセリフじゃ」

「……………」

呆れたように言う魔王に対して、勇者は少し迷ってから言葉を続ける、

「たとえば、この身、何度たおれようと、我が命、我が魂が朽ち果

てるまで神々の力で何度でも蘇り貴様の前に立ちふさがるだろう」

「それで、高笑いしたら、完全に魔王じゃな…、しかも、戦い方が蘇生頼みとは、魔王どころか、それ、もうゾンビじゃろ…」

「……………」

- - - - -

勇者視点

くそ、何なんだこの魔王ってやつは、エンカウントしたと思ったら、速攻で僧侶（女）と、魔法使い（女）と戦士（女）をムチャクチャチートくさい、魔法で葬りさつたくせに、僕に対しては、ねちねちと死ねない程度のダメージでいたぶってくる…

とつ、思えば面白そうに僕のセリフに対していちいち、ツッコミを入れてくるし、よくわからん？

だかな、魔王お前の遊びのおかげで最後の一撃を撃つための時間稼ぎはできた。

いくぞーか八かの

「我放つ聖光の一撃」《セイクリッド・ブラスト》

- - - - -

魔王視点

ふふふ、ほんとに飽きさせない奴じゃ、女三人連れて現れたときは、生き返ることが、できぬくらいまでバラバラにしてやろうと思いましたが、ていうかどういことじゃ連れている仲間がまえと違うとか、これなら、まえの戦士（男）三人連れた何がしたいのかよくわからんパーティーの方が遙かに増しじゃ…

て、そんな、話じゃなくてのー、ん、勇者が何かやろうとしてるのー、どれ、少し反撃してやるかの…

「我穿つ漆黒の三つ又魔槍」（ブラッド・ジャベリン）

- - - - -

勇者の身体を何十本の魔槍が貫く、それでも、勇者は口元に笑みを浮かべていた。

「魔王、油断したな…」

魔王の身体を一条の光が貫き通していた、闇雲にに放ったはずの一撃は、魔王の結界ともに、奇しくも魔王の核を撃ち抜いていた、

「クツクツクツ、久しぶりだよ勇者、何千年ぶりかのう、これが死ぬ感覚というやつだったかのう」

どこかうれしそうに声色を発しながら、徐々に魔王の身体が虚空に消えて行く、

勇者も限界なのか、色の無い瞳で虚空をにらむ、

「さようならだ、魔王、二度と出会わない事を願っているよ」

「つれないのう、お主が居なければこんな世界、詰まらぬではないか…」

「僕は、もうごめんだ…終わることの無い、この不毛な戦いも…お前のその見慣れた面を拝むのも…」

「見慣れた面…、おお、そうか、そうじゃのう、長き、遊びに付き合ってもらった礼もあるしのう」

何か納得したように、魔王がうなずくと、それっ、っと一声発してその頭にかぶっていたらし化け物の顔の仮面をはずす、その下には、

「なっ、お…おんな！」

「またのう勇者、輪廻の果てで合おうぞ、いつまでも続く終わり無き時の果てでのう…」

そう、一声かけると魔王は、ゆっくりと虚空にきえさった。勇者の驚いた顔がさぞ可笑しかったのか、その口元に微笑を浮かべながら

勇者と魔王（後書き）

今回は、書き溜めていたので投下します。
転生物のぞくに言う一章ですね。

転生者 勇者（前書き）

二話目です。

転生者 勇者

薄っすらとしていた光が瞬きを繰り返すことに、段々ハッキリしてくる。

またか、何度転生を繰り返しても、あの腐れ女神と顔をあわせるのだけは、憂鬱だ。

「お帰りなさい、今宵の旅はいかがでしたか、『導き手』殿」

目の前には、BL小説を片手に、女神様が紅茶を飲んでいた。

「ただいま戻りました、女神様。今回は、魔王を倒せたものの、私も命を失ってしまいました」

何時もの事なので、特に気にせず返事を返す、

「そう、お疲れ様。それで『導き手』殿、次はどこに行きたいですか？」

手元から少しも目線を話す様子が無いまま、少し頬を染めている女神様が聞いてくる。

「どこでもかまいません、女神様の御心のままに。と、言いたいところですが。一つだけお願いが、魔王のいないところでお願いします」

正直行く場所はどこでもよかった、とりあえずこの腐れ女神様とあの魔王から離れられるなら・・・

「魔王、ああ、『秩序』^{魔王}のことですか。つまり、魔王である彼女がいなければどこでも良いと、言うことですね」

BL小説を凝視したまま、返事をする女神様、てか、このお方さつきから一度も瞬きしていない、魔物よりよっぽど怖かった。

「ええ、どこでもかまいません」

ちなみに、今まで繰り返してきた転生の中で、魔王の性別を知ったのは始めてだ。

というか、なんども会っているのに、魔王に性別があると知ったこと事態が初めてだ。

いつもいつも、化け物の皮なのか、幻影魔法の一種なのかよくわからないが、典型的な『魔王』然とした格好をしていたため気にしたことすらなかったのだ。

そんな感じで、少しそれてしまつて気がする思考を悶々と続けていた所に、ありえない言葉が降ってきた。

「では、さっきまでいた時間軸から三千年後に転生してください」

では、とは何だろう、確かにどこでも良いと言いはしたが、三千年後だと。

脈絡が無さ過ぎる、てか、一回くらいその手元のBL小説から目を上げるよ、この腐れ女神様が泣くぞこのやろう。

と、戸惑う思考を押さえつけて、とりあえず疑問をぶつけてみることにする。

「三千年後ですか、せめて、その理由だけでも教えていただきたいのですが、この腐れ・・・」

おっと、考えていたことがそのまま口から出そうになった。

「理由ですか、転生の時間を決めるのは、私ではなく『時代』なのですよ、私は『導き手』を必要としている『時代』に、あなたを送っているに過ぎませんから」

腐れ女神様は、まったく顔を上げずに理不尽な言葉を、吐き続ける。

「わかりました、ではそれで納得することにして、三千年後に行つてまいります」

まあ、このくさったお方と問答をしてもしかたがないので、内心の動揺をもみ消して指示に従うことにする。ていうか、この人（人ではない？）は、一度言った言葉をけして曲げないので、反論する意味がまったく無いのだ。

そんな感じの会話を終えて、体をリラックスさせると、ゆっくりと目を閉じていく。

転生のための準備だ、感覚としては、睡眠が一番近いかもしれない。

「では、おやすみなさい『導き手』殿、最後の旅に光の加護があらんことを」

薄れいく意識の中で見たのは、手元から少しだけ目線はずした女神様だった。

その表情が、少しだけさびしそうに見えたのは、僕の気のせいかもしれないが……。

転生者 勇者（後書き）

感想などありましたらよければ。

転生者 魔王（前書き）

三話目です。

転生者 魔王

わたしが、転生の間に入っていくと、女神様がその手で優しく光り輝く球状の者を抱きしめていた。

「なんで、そこまで大好きなのに、いつも本で顔隠して気の無い不利をするのかねえ、あんたは」

「な、ナンノコトデスカ、知りませんよ」

私は腐った林檎なんですから、とか意味のわからんことをのたまってらっしゃる方の頭を、ひっぱたいて、とりあえず意識を戻すかね。

「おい、帰ってきんしゃい、この腐れ女神」

「ぶはっ、って腐っても女の子ですよ、顔面はやめてください、顔面は」

腐ってもって、勇者の前ではかつこつけるくせに私のまでとことん繕おうとしないなこのお方は。

「これが、恋ってやつかねえ、甘酸っぱいねい」

「ぶっはー、っここ、鯉、淡水魚には興味ありませんからー」

「」
なんかあせった女神様が、紅茶噴出しながらおろおろしていらつしやる、おお、おもしろい。

て言うのは、置いていてこつからは少々まともな話だね。

「で、女神様、実際問題私たちが『三千年後』に転生するって言うのはなぜなんさね、それにさっきの最後の旅って言うのも気になるさね」

私が、会話を変えたことによつやく落ち着きを取り戻した女神様（腐）、

「て、（腐）てなんですかーーーーー」

「なにに、叫んでんのや」

「うう、世界の不条理にです」

と、腐った小説に顔うずめながら泣きまねしちやるけど、口がにやついてるって、女神様（腐）、

「あなたもですかーーーーー、いえもういいです、これ以上いくと話が進みません
それで、なぜ『三千年後』かって話ですな」

「そやそや」

「実は、私の力では直接『三千年後』に干渉できないですよ、多分人間たちが何か世界に干渉したんだと思うんですけど
だから、実際に送るのは、十五年くらい前になると思います」

なるほど、『三千年後』に何かある可能性があるから、それを調べ
てほしいと、で、実際送られるのはその十五年ほどまえっちゅうこ

とやな、まあ十五年で準備しろってことかいな、なかなか厳しいこと言ってくれるのな。

「十五年か、なかなか、厳しいこと言ってくれるのなあ」

「まあ、初心に戻ったつもりで、楽しんでくるといいですよ」

初心？ちゆうことは、

「なんや、うちら、今までの成長全部パーなんか」

「ええ、まあ、そういうことです、『三千年後』に飛ばすって言うのはそれだけリスクの高いことなんですよ」

「マジかい、それじゃうちだけ二百年待ったりしなくちゃいけないんじゃない・・・」

「それは、大丈夫です『導き手』と『秩序』は対の存在ですから、ちゃんと同じ時空に落ちるようになりますよ」

その言葉にちよっとほっとするわー、正直勇者たんが二百年も来てくれないとかなきそうになるところだったよー、

「それじゃ、最後の話ですね」

いつにも無く、まじめな顔の女神様（腐）、

「もう、いいです・・・」

「何いきなり、いじけてんのや」

胸に抱きしめた勇者の魂にのの字をかくなや、

気をとりなおして、

「それじゃあ、最後の話ですね」

「なんや、さつきから最後最後って、なんかもう二度と会えない見たいやんか」

「ええ、そのまさかですよ」

「な、」

「今までの、数え切れないほどの転生、それに今回の『三千年後』もの月日を越える転生、はつきり言って、お二人の魂はもうこれ以上、転生という輪廻に耐えられる状態ではないのですよ」

な、かなり驚きの報告やね、そうか

「じゃあ、これでお別れなんか」

「ええ、そういうことになりますね」

だから、さつきも勇者の魂抱きしめてないておったんやな、私らは存在を付加されて、この世界の守り手として女神様に作られたんやから、子供みたいなもんやもんな、

「ふん、湿っぽい話はなしや、ほなうちもいくわ」

「魔王たん、言葉使いがめちゃくちゃですよ」

「む、わかってるわ」

「ティツシュは持ちましたか、ハンカチは、さびしくない？大丈夫？」

「ああ、もう遠足前のお母さんかって、大じよぶやから、安心して見送らんかい」

そう言つて転生陣の上に立つ、ほな、いこか。
うるうる、瞳に涙を溜めている女神様は見ない見ない。

「それじゃあ、いつてくるよ」

「うん、がんばってください・・・」

「いままで、ありがとうな・・・、お母さん」

キューーン、光に包まれながら静かに魂に還っていく。
さようなら、おかあさん。

しばらく経つて、転生の間には、なきながら二人分の魂を抱きしめている女神様がいた。

「さようなら、クレア、サクラ
きつと、いえ今回こそは、二人とも幸せになるのよ」

やさしく抱きしめた、二人の魂が静かに世界に還っていく。

そこにあるのは、今まで以上の困難だろう、それでも二人には幸せになってほしかった。

たった二人の可愛い子供たちに。

転生者 魔王（後書き）

次でとりあえず今回の投下分はおしまいです。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」b y女神様（腐）（前書き）

とりあえず転生編最後です。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」b y女神様（腐）

そこにあるのは静謐な闇にして、暖かい空間。

俺の意識が戻ったのは一寸前だった。

きつとここは俺の母親に当たる人の、お腹の中なのだろう。

そこまで、理解してしまさながら子供に戻ってしまったのかと心底後悔する。

だって、あれだぞ、なんていえばいいんだ、ここ最近はある程度年をとった状態で転生してたからな。

気恥ずかしいというか、魂の年齢的には何千歳経っているかわからない俺だぞ。

と、そこまで考えて、この母体という空間にもう一人、先客がいることを思い出した。

と、言ってもおれは今意識が戻ったという話でずっと一緒にいたのだろうか。

そうだな、この子は、男の子だろうか、女の子だろうか。

きつと俺は遠くない未来に旅に出ることになるだろうが、それまでこの子を大切にしようとなんとなくそう思った。

ん、世界が明るくなった、もしかしたら生まれるのかもしれない。

「おぎゃーーーーー」

そう思っていたら、自分の口から酸素を求める産声があがった、

あぶねー、正直呼吸できなくて死ぬかと思った。

まあ、俺のことはいい、俺のあとに妹も無事生まれてきたみたいだ。

女の子だ、妹だ、ワッショイ。

そして、妹が産声を上げながら静かに目を開ける、いやーやっぱ俺の妹可愛いな。

そして俺と妹の目が合った瞬間俺は理解した。

確かに意思が宿る、その瞳。

何度も顔を合わせたか、実際に顔見たのは一度だけ。

それでもわかる理解できてしまう。

俺の妹は、魔王だ……………。

・よろしく願いします、お兄様。

双子だからなのか、なぜか伝わってきたその言葉

それを聞きながら俺は意識を失った。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」b y女神様（腐）（後書き）

正直何歳からはじめるか悩んでいます。がぼちぼちがんばります。

誤字脱字感想など書き込んでくれると嬉しいです。

最強の妹と最狂の母上（前書き）

悩んだ末、とりあえず三歳から

理由は、自分も物心がついたのがこのくらいだったかなー
とかそんな単純な理由です

髪の部分に黒のメッシュが入っており、目は蒼の瞳と金の瞳のオッドアイになっているし、サクラは綺麗な黒髪で前髪に金のメッシュ、俺とは左右対称のオッドアイをもっている。

正直に言おう、黒髪のオッドアイ、しかも金のメッシュを丁寧に三つ編みに結い上げた今、目の前で小首をかしげている少女は、正直めちやくちや可愛かった。

仮面をつけていた魔王時代ならともかく、俺はこの凶悪な可愛さを持つ妹魔王に二度と勝てないという自身がある。

しかも三歳だぞこの美貌でゴスロリドル見たいな格好して、小首を傾げてみる。

お兄ちゃん、悶絶死するわ。

念話でしか、意思疎通ができなかったところこそがんばったが、もう無理です。

お兄ちゃん、この子がいないと生きていけません。

は、今の笑顔はそこまで考えてのことかなんと言う策士、お兄ちゃん子のこの将来が心配です。

「どうしたの、クレアお兄ちゃん」

「サクラ」

「はい」

「お母様の、足音がする」

ドバーーン、毎度毎度、家が壊れるんじゃないか、というレベルの音を立てて、母親が外に飛び出してきた。

「クレアーーーーー、サクラーーーー、お母さんを置いてどこにいったしまったのーーーー、」

そして、絶叫、ここが閑静な森の中にある自宅じゃなければ、近所から苦情がきそつなほどのおんりょうである。

「おかあさん、ここにいますです」

クスッと、クレアが人懐っこい笑みを浮かべると、俺意外と話すときの年相応の口調になる。

「クレアーーーーー、サクラーーーー」

母、マリアが、騎士もびつくりのスピードで俺たちの前まで来ると、ひしと俺とサクラを抱きしめて、オンオンなき始めた、こうなるとまだ年相応の体しかもたない俺とサクラには振りほどくこともできず、されるがままになるしかない。

「ははうえさま、なきやんでください、お、ぼくとサクラは、ははうえさまがねているあいだに、おはなのかんむりをつくって、おどろかせようとしただけなんです」

「クレア、サクラ」

もしもの、ために考えておいた言い訳を俺たちを抱きしめて泣きじやくっている母親に打ち明ける、母も嬉しそうに泣き顔を笑みの形に変えながら。

「おきて、二人がいないことのほうが驚いたわ、この馬鹿息子」

罵倒してきた、ええー、今罵倒されるシーンだっけ。

ほめられるとか、そんな感動的な展開は無いですか母上。

実際のところ妹と普通の言葉遣いで話すために、人気の無いところに出てきただけだったので、つかまって家に帰るのに反対はしないのだが、この後、一応作っておいた花の冠を頭につけた母親に小脇に抱えられ家路につく俺たちであった。

「サクラ」

「はい、おかあさん」

「ちなみに、この冠の作り方は誰に教えてもらったの？」

「ドロシーですよ、おかあさま」

正直に、俺達の家のメイドさんの名前を明かすサクラ、

「そう、じゃあドロシーにきつくお説教しとかないとね」

「へ、なぜですかはうえさま」

「あたりまえでしょ、花の冠のせいで可愛いクレアとサクラが家出したのよ！――！」

――家出じゃねーよ！

心の中で同時にツツコンだ俺達を小脇に抱え、今日も優雅独尊な母が行く。

いや、普段はかなりの淑女なんですよ。

俺とサクラのこととなるとキャラ変わるだけで。

そんな、誰に弁明しているのかわからない、俺達を抱えて母は家路に着いたのだった。

ちなみに、予断だ、両手がふさがった母上が扉を蹴破ったのは。

母上、俺とサクラのこととなるとキャラ崩壊するのは、勘弁してくれ。

最強の妹と最狂の母上（後書き）

とりあえず、ぼちぼちとやっていきます。

誤字脱字感想などありましたら書き込んで下さると嬉しいです。

更新としましては、基本毎日、祝日、休日などはアクア、とグラビを書いてるので更新しない場合もありますが、基本平日は短いですが一話ずつ落としていきたいと思います、このペースでいつまでいけるかは不明ですが、お付き合いいただければなと思っています。

魅了する息子とストーキングする父親（前書き）

なんか、サブタイトルがもういろいろ駄目なことになっていますがお気になさらず。

魅了する息子とストーキングする父親

「なあ、妹よ

「はい、お兄様

「なぜお前は、【以心伝心】を使っているときと、普段呼ぶときに呼称が違うのだ？」

「お兄様、ドロシーたちの前でお兄様と呼んでほしいのですか、ポツそんな台詞と共に頬を染める三歳児と、それを見て身悶える三歳児、そんなあたり前の日常が今日も続いていく。」

「それで、サクラ」

「どうしたの、クレアお兄ちゃん」

「クツ、お兄ちゃんも捨てがたい

「お兄様、思考が駄々漏れです

「ホン、と心の中で気を取り直して。

「今日は、何をして遊ぼうか」

「かけっこをしますか、それとも、またお花の冠を作りにいきますか」

- いい、模範解答だ妹よ

- お褒めに、預かり光栄ですお兄様

- それで、結局のところどうする

- 今現在の、自分達の戦力の分析それは必須事項だと思います

ちなみに、サクラ、魔王の言葉使いに違和感がある方もあると思うので、補足するが。

簡単にいえば、転生によって幼児退行しているのである。

あの、しゃべり方、性格は何年も生きて出来上がったものであり、転生当初、特に子供に転生したときはいつもこんな感じになる。

「そうだね、じゃあ草原に行ってかけっこをしようか」

- そうだな、広場のほうで体力の確認を行おうか

「わかったよ、クレアお兄ちゃん」

- わかりました、お兄様それでは、先に行っていますので

「うん、サクラは先に行っていていいよ、ぼくは、お父様に許可を貰ってくるから」

- サクラは、先に行っていてくれ、俺は扉の陰に隠れた、ストーリーに話をつけてくる

「うん、いつてきまーす」

- 頼みます、お兄様

扉の影から、サクラが向日葵のような笑顔を浮かべてとてと走り出したことによって、あせって身を隠す気配が伝わってくる。

- まだまだ、甘いな、お父様

俺も、ひとつ苦笑を浮かべると、父親の書斎に向けて走り出した。その途中、隠れている気配のすれすれを通っていくことも忘れない。

- おおー、あせってるあせってる

決して急がずに、走って父親の書斎の扉の前にたどり着くと、俺はノックをして部屋の扉を勝手に開けた。

「しつれいします、おとうさま」

「ああ、よくきたね、クレア」

軽く息を乱しながら、出迎えてくれた父親、見た目は蒼髪でモノクルをかけ魔法使いが好んで黒いローブを身にまとった青年、年齢不詳、は転移魔法らしい魔法の名残を一生懸命隠しながら、俺にさわやかに微笑んだ。

- お父様、体面保つためにそこまでするんですか

もちろん、俺の心の声は父親には届かない。
ちなみに、年齢不詳の某母上様が金髪なのに対して、俺は金に黒のメッシュ、サクラは黒に金のメッシュの髪色のため、一時期、妻が浮気をしていたんじゃないかと悩んだとか。

まあ、今そんなことはどうでもいい、いまは外にいく許可を得ることが先決だ。

「おとうさま、サクラとふたりでおそとにあそびにいきたいのですが、よろしいですか」

なぜか、父親が悶えている、何々、「サクラと一緒にの時の凜々しいしゃべり方もいいが、したたらずもたまらない」だと、お父様、安心してください、あなたと俺は間違いなく親子です。

「ああ、ぼくはかまわないよ、二人で遊んでおいで、でもくれぐれも危険なことをしないようにね」

よっしゃー、言質はとった、後は止めを刺すだけだ。

「うん、ありがとう、パパ」

太陽の様な笑顔に、蒼目のウインク付の感謝の印、

「グハ、イッテラッシャイ」

ちなみに、お父様が片言になっているのは、ウインクして残った金の瞳、「魔王の魔眼」には「魅了」の効果があるからだ、両眼そろっているときよりは、その威力はかなり落ちるらしいが、好意を持つてくれている人間に使う場合はそれでも十分だった。

なぜか吐血しながら身悶えている、父親を置き去りに、俺は外に向かって走り出す。

今日、やることは自分達の今の実力の確認。

それを行えば、これから十二年間の間で自分達がやるべきことが見

えてくるだろう。

そんな期待を込めて俺は走り始めた。

「ふう、我が子ながら、なんて威力だ」

息子が走り去って数分、ようやく、意識を取り戻した父親は、部屋の窓を開けると、静かに詠唱を始める。

「さて、いくか、今日はどんなびつくりすることを拝めるかな」

飛翔魔法、操作性の難しさのみを言えば最上級魔法にも劣らぬ魔法を、子供達のストーリーキングのためだけに発動すると、今日も心配性な父親は空に旅立っていった。

魅了する息子とストーキングする父親（後書き）

黄金拍車様わざわざ、誤字のご指摘ありがとうございました。

これからも誤字脱字感想などありましたら書き込んでいただけたら幸いです。

混成種 & 1t・ハイブリッド & gt・な俺達（前書き）

その名のとおり今回は、存在と二人がどんな状態なのか、そんな軽い説明です。

混成種 & 1 t : ハイブリッド & g t : な俺達

- 妹よ

- はい、お兄様

- 端的に言おうか

- はい

- 俺達は、弱くなってしまったようだ

家から、少し離れた草原の中、俺は、のんびりと座り込むサクラの傍でうなだれていた。

先も言ったとおり、俺達は弱くなっていたからだ、いや、正確にいえば、俺達ではなく、主に俺が。

子供になっているのだから、当たり前だつて。

そうゆう意味ではなく、『存在』として俺は、弱くなっていた。

簡単に言えば、魔王と勇者、血がつながってしまった結果、俺達は存在が混ざり合ってしまった。

ゆうなら、魔をつかさどるものと聖をつかさどるもののハイブリッドである。

しかし存在として、ハイブリッドが成功するわけは無く、非常に不安定な二人が出来上がったといえるのだった。

まずサクラ、魔王は、魔族の膂力と無尽蔵の魔力を有した上で、聖属性以外の魔法がすべて使える、魔をすべる王、それがもともとの存在である。

今現在のサクラは、俺の聖属性をほとんど吸収し、全属性の魔法を使えることがわかった。なに、最強じゃないかって、はつきり言う、

最弱だ。

まず、本来魔法使いは、一属性しか魔法を持つことができない、ほとんどの魔法使いは、己に与えられた属性を極めていき高みを目指す。

そして、その行き着く先には、ほとんど差異は無いのだ。

たとえば、水の魔法使いなら、水を物理的に操る事で、飛翔することも可能だし、火の魔法使いなら、空気を爆発させる事で、空を飛ぶことができる。

つまり、属性が違えども、そのたどり着ける場所は、己の努力、独創性しだいなのだ。

しかしサクラの場合は、違う、すべての属性を操れるということは、そのすべての属性を極めるのにほかの魔法使いの10倍以上かかるということをする。

全属性が、たどり着ける高みが一緒なため、全属性を使えるメリットはあまり無いのだ。

そして致命的なのが、俺の聖属性を取り込んでしまったせいで、彼女は魔を浄化されてしまっていた。

つまり、今の彼女は魔族より神族、そして神族より限りなく人間に近い存在である。

つまり、魔族の強力な臂力と無尽蔵の魔力というアドバンテージを失ってしまったのだ。

そして一番深刻なのが俺であった。

おれ、勇者じゃなくなっちゃった。

サクラの、魔族の証である魔性を俺の聖属性が打ち消したため、俺の身体には聖属性が少しも残っていない、その上、消しきれなかった魔性が俺の身体を侵食したため、今の俺は、サクラより魔族に近い存在になっていた。

しかも、俺がもともと操れた魔法は聖属性のみ、その聖属性が体から無くなった今。

- 俺、魔法使えないじゃん

というわけで、俺は今現在、絶賛うなだれ中です。

- お兄様、気をしっかり持ってください、お兄様には無尽蔵に近い魔力と、勇者を軽く越える膂力があるではないですか、私なんて、火の玉一個で魔力切れの上に、ここまで歩いてくるだけで座り込んでしまうほど体力が無いのですよ

- 魔力があっても、それを使える系統魔法が無いんだよ、しかも、力も強すぎて意識すると制御しきれないし

俺のパワーは、勇者であつたころとは比べ物にならないほど凶悪になつていた、三歳児がそれを実感してしまうほどに。

日常生活では、支障が無いのだが、いざ、剣の稽古でもしてみようかと木の棒を持った瞬間、俺の手の中でその木の棒は木っ端微塵に砕け散つた。

ために、広場にあつた大岩を思いっきりぶん殴つてみた、簡単に言おう、爆裂した。

三歳児の、パンチで。

俺が、泣きそうになつたのは言うまでも無い。

うん、これからどうしようか。

とりあえず、サクラは体力と魔力保有量の訓練、俺はこの有り余る魔力の使い道と、ひどすぎる力の制御だな、まあ、とりあえずは明日からだ。

今日は、もう動きたくない。

- ちなみに、お兄様

- なんだ、妹

- さっきお兄様が、大岩を爆裂させたときに

- ああ、させたときに

- その破片に当たって、お父様らしき物体が上空から落下、そのま
ま近くの森に突っ込んだのですが、どうでしょうか？

- ほおっておけ

混成種 <t>・ハイブリッド >t>・な俺達（後書き）

投稿時でPV2756 ユニーク384でした。

皆様、ありがとうございます。

誤字脱字感想がありましたら書き込んでくれたら嬉しいです。

書庫に行こう、妹よ（前書き）

タイトルに反して、今回は妹目線です。

まあ、いまところは感情が希薄なので、あまり楽しいできになっている保障はありませんが。

書庫に行こう、妹よ

- お兄様

- ん、どうした妹よ

- どうして、私達はこんなにコソコソとしているのですか

- いい質問だな、妹よ、今からお父様の書庫に忍び込むからさ

- どうしてですか、魔法の技術と知識なら私達は十分持っていると
思いますが

- 知識が偏りすぎていると思うんだよ、俺達は転生する前からこの
三千年間なにがあったのか知らないからな、つまり俺達が魔法だと思
っているものが今でも魔法だとは限らないと思うわけさ。

- なるほど、それで、お父様の書庫にどうやって入るのですか、窓
から出れる外と違って書庫は本が傷まないように窓が無いですし、
扉のノブも私達が届く高さじゃないですよ？

-

固まる、お兄様でした。皆さまこんにちは、私サクラは今日も愉快
なお兄様と廊下を歩いております。

- お父様に、あけてもらう

・お父様が今日出かけているからこそ、私達は書庫に向かっていると記憶しています

・母上様に、あけてもらう

・お昼寝中の、お母様を起こした瞬間私達は、二度とお母様の腕から離れられなくなるでしょうね

・ド、ドロシーにあけてもらう

・それが、妥当でしょうね

なら、なぜ、最初からドロシーに頼まなかったのか。

まあ、あまりドロシーに迷惑をかけたくないのでしょう、私達とは五歳違いの姉のような存在であり、メイド長のカタロニアさんの娘であるドロシー、カタロニアさん譲りの銀髪に薄い褐色の肌、八歳といっても、可愛い盛りのドロシーに実質三歳、精神年齢不明のお兄様は、あまり迷惑をかけたくないようです。

いまさら、遅いとも思いますし、それを嫌がってもいないと思うのですが。

・お兄様

・どうした、妹

・ちょうどよく、ドロシーがこっちに歩いてきてますよ

・．．．．．そうか

ため息をひとつ吐くと、お兄様はその表情を普段の子供らしいもの

に切り替えました。

「ドロシー姉ちゃん」

そう言つて、こちらに気づいて笑顔を浮かべたドロシーに抱きついていきました。

お兄様、楽しそうですね。

「カレン様、サクラ様、今日はどうなされたんですか」

その端正な顔に微笑を浮かべた、ドロシーがお兄様を抱きとめながら聞いてきます。

「うん、サクラと二人で、文字のお勉強をしたいんだ、だから、お父様の書庫を開けてもらえないかな」

お兄様、ドロシーの前だと、大人ぶりますわよね。

「書庫ですか、かまわないですが、お二人にはまだ早いのでは」

ドロシーも、チョット困惑気味なようですね。

「お・ね・が・い」

上目使いで、笑顔を浮かべると「魔王の魔眼」なウインク、お兄様それは反則です。

「ハ、ハイ、わかりました」

ほら、ドロシーも顔赤らめてふらふらしてるじゃないですか。

けっか、扉は開きました。

ドロシーは、だめ、相手はクレア様なのよ、でもこの胸の高鳴りは、だめよ相手はまだ三歳なんだから、などぶつぶつ呟きながらお仕事に戻って行きました。

ドロシー、お兄様を盗ったら、許さないですよ。

おほん、それでは気を取り直して、本でも読みますか。

「あら、どうしたんだいドロシー、風邪かい？」

お母さんがお料理中の厨房に、戻ってきた私にお母さんが尋ねてきました。

お仕事中はとっても厳しいですが、普段はとっても優しいお母さんです。

「うっん、違うよチョットのぼせちゃっただけだよ」

「それが、チョットなのかい」

わたしに、そっくりな顔、口調に似合わないその綺麗な顔を、苦笑の形に変えると、優しくポンポンと私の頭をなでてくれました。お母さんの手はとってもあったかくて気持ちがいいです。

「ありがとっ、もう大丈夫だよ、お母さん」

「そうかい」

と、優しい笑顔を浮かべると料理の続きに戻っていくお母さん。
それを、見て私もお仕事に戻ることになります。

「あの、ませガキ、ドロシーに手出したら、消してやる」

そんな、呟きが聞こえたような気がしましたが、気のせいだと信じています。

書庫に行こう、妹よ（後書き）

幼少期は、ある程度の力の説明

子供時代は、ある程度の力の使い方を覚えていく時間

そして、十歳で学校編を始めたいと思っています。

今のところ、予定なので、そこまで、たどり着くのにどれだけかかるかわかりませんが、お付き合いいただければ幸いです。

誤字脱字感想などがありましたら書き込みをいただきたいです。

考察する三歳児と、わずかに見えた光明（前書き）

ふむ、もう題名があれな感じですが。
書きたくなったので、今日二話目です。

考察する三歳児と、わずかに見えた光明

・妹よ

・なに、お兄様

・この文字はなんて読むんだ

・これは、火炎球みたいですよ、古呪魔法＞ルーンスペル＜で言うところのファイアーボールだと思うのですが

・マジか、何でこれが中級魔法になってるんだ、ファイアーボールなんて火属性の基礎の基礎じゃなかったか？

・それが、今のレベルなんだからしょうがない、でもそのおかげで魔法が使えるかもしれないんだから文句を言わないで

俺達が、書庫にこもるようになってから一ヶ月くらい経っていた。今では、お父様が出かけるとドロシーが、書庫の前で俺達を待っていてくれるくらいである。

ちなみに、俺達がもとと使っていた魔法は古呪魔法＞ルーンスペル＜と呼ばれていて、今は、古代研究を生業にした学者達が調べる程度のものに成り下がっていた。

ちなみに、古呪魔法＞ルーンスペル＜は力ある文字、古呪に魔力を込め、発動させる。「我放つ聖光の一撃」《セイクリッド・ブラスト》なんかがいい例だと思う。

つまり、力ある文字で事象を改変するそれが俺達が使っていた古呪魔法＞ルーンスペル＜であった。

今現在、魔法と呼ばれているのは、魔方陣に魔力を流し込んで使う系陣魔法>エレメンタルスペル<呼ばれるもので、魔法であり魔法陣に魔力を流し込む事で、魔法を発生させるようだ。

ちなみに、魔法陣を作り出せるほどの力量を持ったものはほとんどいないため、新魔法が一年に一個できればいいほどだといわれているらしい。

系陣魔法>エレメンタルスペル<の、よい所をあげるなら、古呪魔法より圧倒的に魔力の消費を抑えることができるようになったことらしい。

たとえば、同じファイヤーボールを使うだけでもその魔力の消費量は、半分以下だというわけだ。

そしてもうひとつは、魔力さえあれば誰でも使うことができるということらしい。

もちろん、一人一属性という原則は生きているらしいのだが、魔法の質を大幅に落とした結果、中級魔法程度までなら誰でも使えるらしいのだ。

もちろん、上級魔法はその系統保持者にしか扱えないそうなのだが、中級魔法程度は、その強さは込められた魔力の量で決まる、魔力を一必要とする魔法に十をつぎ込んでも威力が十倍になることは無いが、大体半分の五倍程度にはなるらしい。

まあ本来は、こんな魔力の無駄をするくらいなら、己の系統を極めたほうが早いので、こんなこととする馬鹿はいないそうなのだが。

俺は、今、自分の系統を失っており、その馬鹿のことをできるだけ魔力があつた。

これは、試してみる価値がありそうだと心に刻んでおく。

まあ、今やることは、この大陸文字を完全に読めるようになることだが。

なに、読めているじゃないかって。

これは、妹と二人で、一ヶ月間「古呪文字読解」という辞典を片手に、ウンウンうなった成果だ、古呪文字は読める俺達だったが、三

千年経って公用文字が大陸文字と呼ばれるものにならなかに、なぜ大陸文字の辞典じゃないのかって。そんなもの読めるか、古呪文字で書かれている辞典がこれしかなかったから、古呪文字から逆引きしたんだよ。

おかげで、ある程度覚えるまで一月もかかってしまった。

とりあえず、しばらくは部屋で子供用の童話でも読んで、読解力をつけようか。

サクラは、積極的に辞典を開いていたせいで、軽い学術書程度なら読めるようになってしまったようだが、さっきの知識もサクラから教えてもらったものだ。

まあ、とりあえずこれで方針は決まった。

サクラは、魔力保有量を増やすことだ、体力の問題もあるにはあるが、今の身体ではどうがんばらたって限界がある、それなら体力のほうは体の成長任せで、魔力を少しでも増やしたほうがよいだろう。とりあえず、今は、系陣魔法＞エレメンタルスperlく練習もかねて、魔術書「悠久の闇」を片手にぶつぶつやっている。

何個か、魔力保有量を増やす方法はあるのだが、はつきりいって、魔法を使い続けるて魔力を空にする、それを繰り返すのが一番危険性が少なく身体への負担も低い、サクラは今のまま思ったとおりにやらせるのが一番いいだろう。

もちろん、積極的に遊びに連れ出した体力をつけさせるのも忘れな

いが。

俺は、そうだな、さつさと文字を覚えてこの世界の勉強でもするか。なんかお父様の書庫を見てたら「魔王と勇者についての考察」なんて、気になる題名の本何かもちろほら出てきたしな。

後は、この有り余る力をどうするかな、いやまじでどうしよう、三歳児なのに素手で林檎とか握りつぶせるんだぜ。

とりあえず、力の制御と、勉強だな。

いやー、勤勉だね最近の三歳児は。

考察する三歳児と、わずかに見えた光明（後書き）

えーと、わざわざ評価ポイントを入れてくださった方、本当にありがとうございます。御座います。

感想などいただけると嬉しいです。

それでは、誤字脱字感想などお待ちしております。質問でもいいですよ、それがいいインスピレーションになる場合もあるので。

心配性な親達（前書き）

今回は、つなぎなので短いです。

心配性な親達

「クレア、サクラ、体力が有り余っているなら、ドロシーと一緒に村に遊びにいくといい」

お父様の、そんな一言で、俺達は村に行くことが決まった。

まあ、ドロシーも俺達が生まれる前は、村の子供と遊んでいたらしい。

母上様が、俺達を身ごもった時点で、母親の暇つぶしに、散々勉強や裁縫などを叩き込まれていたらしく、しばらくは村にはいないそうだが。

「シルクちゃん元気かなー」

といった感じで、同い年の村の友達に思いをはせている。

「そうですね、お父様、ドロシーも楽しみにしているみたいですし、同い年の子供達と遊ぶことが一番手加減を覚えるのに最適ですものね」

「クレアとサクラ、難しいことは考えなくていいから、子供らしく楽しんできなさい、ドロシー二人を頼むよ」

お父様が、苦笑を浮かべながら俺をいさめてくる。

事実、最近子供らしい振る舞いが少なくなったなー、と喜んでいいのか寂しめばいいのか、困っているお父さんであった。

「……はい、わかりました」

俺と、サクラ、ドロシーの三人で異口同音に返事をする、村に向かつて駆け出していく。

それを見送るために玄関に出てきた妻に、愚痴り始める旦那そこにいた。

「はあ、成長が早すぎるのも問題だな、最近はおくの書庫の蔵書もほとんど読みきってしまったようだし、最近は二人で隠れて魔法の練習もしているみたいだしな」

「いいじゃない、私は楽しみよ、クレアは私に似て魔法の才能はあんまり無いみたいだけど、サクラはまるで、魔法に愛されているみたいな成長速度だし、クレアもクレアで、三歳で林檎をつぶしてしまっほどの力持ちよ」

「なに、それは知らなかったな」

「サクラは最近、古呪文字に興味があるみたいね、全部ドロシーから聞いた話だから、たぶん正確よ」

「あはは、三歳児に古呪の魔法を使われてしまったら、世界中の考古学者が卒倒してしまうな」

家の前、二人並んで子供達を見送る母と父、少しだけ寂しげな表情を浮かべながら子供達を見送っている二人であった。

失際は、使えるどころか超一流といってもよい腕前なのだが、その辺は知らぬが花である。

「それで、マリアナとカーリアが来るのは、今晚だったっけ」

「ええ、昨日近隣の村までたどり着いたって連絡が来たわ、今日中にはたどり着けると思うわよ」

「そうか、あの二人と会うのも久しぶりだな」

「そうね」

子供達が、見えなくなったのを確認して、ゆっくり扉を閉める二人、その背中にはさっきまでの寂しさは微塵も無く、久しぶりに会う懐かしい友に心をはせていた。

心配性な親達（後書き）

短めなので、気力があれば今からもう一話書く予定です。

村の子供達と、どこかずれてる兄妹（前書き）

ふう、無事に書けました

といっても二話で三千文字言っていないと思いますが。

村の子供達と、どこかずれてる兄妹

「ドロシー、久しぶりだねー」

といてドロシーに抱きついたのがシルクちゃんのような、赤い髪に日焼けした健康的な肌が印象的な女の子だ。

「ど、ドロシー、ひ、久しぶりだな」

と、どもっているのはカルマという金髪の男の子だ、ドロシーとシルクと同じ八歳で村の子供達のガキ大将みたいな存在みたいだ。

「ドロシー姉ちゃん、お久しぶりです」

「ドロシー姉さま、お久しぶりですね」

このませた二人は六歳、銀髪の男の子で、外で遊ぶより家の中で本を読んでいたいと身をもって表現しているクレス、具体的には岩に座って手に持った本から挨拶の時しか目を上げなかった、と蒼髪の女の子で元気いっぱいの子、立ち振る舞いは淑女を目指しているように見えるが、どこか落ち着き無い、今にも走り出しそうな印象なフレスだった。

「こ、こ．．．んにち．．．は、アルマで．．．す」

この挨拶は、俺達と同じ三歳のアルマだカルマと同じ金髪でカルマの妹らしい。

どこか、おっとりとした女の子で人見知りらしい、ちなみに今はカルマの後ろからこちらをチヨコチヨコ伺いながらの挨拶である。

なかなか、可愛い女の子がこんな動きをしているのを見ると、もう、お兄さん悶死してしまいます。

ま、同じ年なんだけどね。

と、いう感じでこの五人が今この村にいる九歳以下の子供らしい。
ん、なぜ九歳かって？

俺達の村では、九歳になると二年間、村の大人の誰かについている
いるなことを学ぶことになっているからだ。

ちなみにこの村、フラグレス村は住んでいるほとんどが元冒険者とい
うかなり特殊な村である。

もともと、冒険者の間で有名だったお父様が、国から爵位と何も無
い土地を貰ったときに、そこに引退した冒険者達が集まってきたで
きたんだという話である。

そのため、この村の住人は皆、それぞれ冒険者スキルを持ったもの
ばかりであり、九歳になったら自分にあつた師の元で一年間びつち
り勉強する制度ができたのだという。

ちなみに、ほとんどのものは十一歳になったら王都グラマリアスの
学校などに進学するのだが、進学せずに成人の十六歳まで師の下で
従事する人もいるんだとか。

進学組にしても、その一年間で冒険者としての基礎を散々叩き込ま
れるため、ほかのところから来た子供とは段違いの成績を誇るそう
だ。

まあ、俺とサクラ、ドロシーの三人はそれぞれの親に従事するだろ
うことは目に見えているので、あまり気にしたことは無いが。

そんなことは、今はおいといて、俺達も挨拶しないと、とりあえ
ずドロシーから。

「みんな、久しぶり、アルマちゃんはじめましてかな？」

「は、はっ」

と、俯きながら返事をする、アルマちゃん、可愛すぎです。鼻血出そう。

「サクラと申します、皆様よろしくお願いいたします」

と、身悶えているとサクラに先を越されてしまった、む、しかもサクラのやつ軽く「魔王の魔眼」使っていやがる。

あああ、みんな、ほほ染めちゃって、見とれてるよ。

じゃ俺も、えん慮無く使いますか。

「皆さんこんにちは、ぼくの名前はクレア、サクラの兄です、これからよろしくお願いいたします」

「魔王の魔眼」を発動して皆の顔をゆっくり見回してから、ぺこりと頭を下げる。

・ふっ、ちよろいぜ

・ええ、ちよろいですねお兄様

・この分なら

・ええ、この分なら

・・すぐにお友達になれるな（なれますね）！！！！！！

どこか徹底的に考えがずれている気がする兄妹であった。

村の子供達と、どこかずれてる兄妹（後書き）

毎日チヨコチヨコ更新していきます。
いつ終わるのやら。

誤字脱字感想などぜひ書き込んでください。
作者そのままやる気に直結する単細胞なモノで。
だめなところでもぜんぜんいいですよ。
ちゃんと見てくれているのがわかって逆に嬉しいです。
別に、Mではないですよ。

駆ける双子と、翻弄される子供達（前書き）

幼少期初めての戦闘編（笑）です。
まあ、ぶっちゃけ鬼ごっこですね。

駆ける双子と、翻弄される子供達

- 妹よ

- はい、お兄様

- シルクが、前方にある岩場の後ろに隠れている、フレスは右の林の中を疾走中、アルマは花畑の方で隠れているのが見えているが、とりあえずは最後にしようと思う

- そうですね、こちらは藪の中でクレスが隠れて本を読んでいるのが見えますね、それと草原のほうをドロシーとその後ろをカルマが走っています

- そうか、とりあえずカルマには罾でも仕掛けておくか、まずは林の中のフレスだな

- ええ、そうですね、私よりお兄様の方が足が速いので、回り込んでください、私は後ろから追い込みます

- ああ、わかった

【以心伝心】にそう送り込むと、俺は身を隠すように走り始める、特にフレスには気づかれないように用心して走り出す。

サクラが、追っかけているはずのフレスの前方、意識が向いていない場所に回りこむと、

「フレス姉、捕まえたー」

笑顔で、フレスにタッチした。

「な、なんですって、．．．．．まあ、あいては三歳ですし手加減ですわ」

絶対、そんな気持ちは微塵も無いだろう真剣な表情だったくせにフレスは、そんな負け惜しみを言っていた。

- 妹よ、シルクに動きは

- まだ、岩場の後ろです

- わかった、林の方に誘導してくれ

- わかりました

そう返事をしたサクラが林から飛び出した岩場を迂回していくのが見える。

しばらくして、岩場のほうからシルクが、その特徴的な赤毛をなびかせてこっちに向かって走ってくるのが見えた。

俺は、ちょうどよい茂みを見つけると気配を殺してしゃがみこんだ。

タタタ、バサッ、

「シルク姉さん、つかまえたー」

茂みの横を通り過ぎるのを見計らって、茂みから飛び出すとシルクを捕まえる。

「へ、クレア君！まさか、誘導されたの？」

びっくりして放心しているシルクをほおって、近くの藪に隠れていたクレスにタッチ。

「クレス兄、みつけた」

「.....うん」

少し顔を上げて、口元に笑顔を浮かべるとまた読書に戻っていくクレス、本は好きだが、遊ぶことも一応嫌いではないみたいだ。

・さて、アルマ最後だから、次はカルマだな

・先ほどドロシーから離れて、草原を花畑の方に走っていきました

・む、花の冠でもプレゼントする気が、サクラは気配を消してドロシーの後ろで待機、俺もすぐ行く

・わかりました、まあ、見通しのよいところで体力勝負になったら流石に勝ち目が無いですしね、ここはせいぜいこの体躯の小ささを生かさせてもらいますか

・ああ

そう送ってから、静かに駆け出す、後ろのほうから三人分の驚いたような気配が伝わってきたが、今は気にしない。
そう、今は人の恋路を、

・邪魔したい（です）。

以心伝心な二人が、草原の真ん中でポケーとしていた、ドロシーの近くに潜伏してしばらく経った。

その手に、小さい花束を作ったカルマがこちらに向かって走ってくる。

「ドロシー！」

・お兄様、カルマが戻ってきました

「どうしたの、カルマ君、こんなところで待っていてって？」

・ああ、見えてる、俺はカルマの背後に回りこむ、サクラはドロシーを頼む

「そ、その俺、ドロシーのことが」

・青春ですね

「ん、私がどうかしたの？」

・まあ、今はラブコメより、鬼ごっこだ、この世は戦争、油断したほうが悪い

・お兄様、声が乱れていますよ

「お、おれ」

顔を真っ赤にして、一生懸命深呼吸しているカルマの後ろにそっと忍び寄る。

「うん」

「ドロシーの、ことが、．．．．す「カルマ兄ちゃん、つかまえた」」

「クレアさま！？え、いつの間に「ドロシー、つかまえましたわ」」

真っ赤な顔のカルマの後ろには、俺が、呆けているドロシーの後ろにはサクラが立っている。

「さて、後はアルマだね」

「さっきお花畑の方で、隠れているのが見えましたわ、兄さん」

そう言って駆け出す、俺とサクラ呆けている二人を置き去りに、あ、ちゃんとカルマに捨て台詞も忘れない。

そっと、近づくとかルマにしか聞こえないようにボソッと。

「ドロシーは、そう簡単には渡さないよ、カルマ兄ちゃん」

小悪魔の笑みを残して俺はサクラを追って走り始めた。

花畑の方で、二人分の歓声が上がったのは、それからしばらくして、カルマがクレアの言葉の意味によりやく気づいたころの話であった。

「何なんだ、あの二人は」

信じられなかった、鬼ごっこが終わってつかれきったのか、ドロシーの膝枕でアルマと一緒に寝てしまった兄妹が俺達を全員捕まえてしまったってことが。

確かに、俺はドロシーに久しぶりに会って、可愛くなっていたドロシーを見て完全に舞い上がってしまったが、それでも俺は、冒険者である親父とお袋の息子だ、野生動物などの気配は敏感だし、心ここにあらずでも三歳児のスピードを交わすなんて簡単なことだった。

もちろん、それじゃゲームにならないから、十分力量差を見せ付けた後はわざとつかまってやるつもりだったが、この二人はそんな俺を軽くつかまえて見せた。

ほかのみんなも、妹のサクラのほうに追っかけられているうちに、なぜか前にいた兄に捕まってしまったというし。

「うん、私もびっくりしたよー、サクラちゃんから逃げてたら、いつの間にか隣にクレアちゃんがいるんだもの」

てな、感じた。

何なんだこの兄妹、特に兄の方、最後の言葉は間違いなく俺に向けて放たれたものだった。

ドロシーは渡さないだと、本当に何なんだこの兄妹は。

「すごいよねー、クレアさまとサクラさまには、いつもビックリさせられるよー」

そんな、感じで軽く話し始めたドロシーの言葉に年長組みは、あり

えないものを見たような表情になったのだが、それはまた別のお話。

駆ける双子と、翻弄される子供達（後書き）

ちなみに、なぜ二人が鬼なのかというと、立候補したからです。
三歳児なので二人一セットで、といった感じですね。

感想誤字脱字がありましたら書き込みお願いいたします。
あと、あらすじを少し変えました報告しておきます。

お客さんと、**露見した片鱗（前書き）**

PVが8000、ユニークが1000を越えました
皆様、ありがとうございます。

お客さんと、露見した片鱗

- 妹よ

- はい、お兄様

- 誰だ、こいつら

- お兄様が知らないのに私が知るはずがありません

カルマやドロシー達と散々遊び倒して寝てしまった俺達、起きてみれば、時刻はもう夕方であり、俺達はそれぞれ帰路に着いたのであった、が、ドロシーとサクラ、俺の三人が家に帰ってきてみると、父親達と楽しそうに談笑している知らない二人組みがいた。

「おお、これがメアリィとクオーツの子供か、似てないな」

そのうちの一人、綺麗な金髪に長く尖った耳、綺麗な瞳は緑の光をたたえている。

長命種と呼ばれる種族であり、まあ、簡単に言えばエルフのお姉さんだ。

実際は結構珍しい種族なのだが、長く転生を繰り返していれば一人や二人であつてはいるし、長く生きる彼らだ、中には転生した後も会ったなんて笑い話もある。

それでも、魔王であり、もともと魔族以外の種族との接触が少なかったサクラはもとより、ドロシーもその可愛らしい頬を朱に染めて彼女の顔に見とれている。

「ふふ、女の子二人は、アイウスの美貌に見とれているみたいだけ

ど、男の子に振られちゃったみたいだよ」

アイウスと呼ばれたエルフのお姉さんに、茶々を入れたのは、蒼髪で女性用のローブを羽織った魔女、その立ち姿からなんとなくお父様の妹なのではないかと推測する、つまり俺から見たら叔母さんにあた人だな。

「クレア君、おばさんって言うたら、許さないわよ」

「おお、心を読まれた！

「どうしたの、キャシー」

不思議そうに、首をかしげているアイウスさん。

「お兄様、思いっきり声が出ていましたが

「なんだと！

「まあ、いいや、こんにちはクレア、サクラ、ドロシー、クオーツの妹のキャシーです」

おお、何とか流してもらえたようだ、何もしてないけどな。

「こんにちはー、私は三人の親友のアイウスです」

と、改めて、自己紹介をしてくれたキャシーさんとアイウスさん。ちなみに、アイウスさんが言っている三人というのは、キャシーのことではなく、ドロシーの母親のマリアのことである。

もともと、五人は冒険者時代にクランを作っていたのだとか。

「「「こんにちは」「」」

三人そろって、ご挨拶、やっぱり挨拶って大切だね。

「キャシー、アイウス、挨拶はその辺でいいだろ、みんなでご飯にしよう」

はい、ここでストップが入りました、犯人はクォーツことお父様です。

「そうね、ドロシー、マリアの準備を手伝ってあげて、二人は着替えておいでなさい泥んこじゃない」

そしてそれに追従するメアリイこと母上様。

「「「はい!」「」」

もう一度、一糸乱れぬ返事をした後、俺達はそれぞれの場所に向かって駆け出していった。

「それで、さっきの話の続きだけど」

子供達が、駆けていったあと、私はさっきまでも話題に戻ることにした。

「三人に、ギフトがついていないか調べてほしいっていうのね」

ギフト、神々の祝福にして加護とも呼ぶべきもの、上神クラスがついている子供は本当に稀だ、たとえ下級神の加護であってもその力はあるし、ましてはそれが大天使クラスや女神クラス、上神クラスだったら物によっては災害と言ってもいいレベルの物になる。

「ああ、戻ってくる前に確かめて起きたい」

兄さんの表情はいつに無く真剣だった。

「はあ、わかったは、でも何もついて無くても落ち込まないでね」

そういつて、私はその魔法をつむぐ、長年かけて私が見えるようになった唯一の古呪魔法。

【我が前に、かの物の加護をさらせ】>マインドサーチ<

「ついてないほうが、どんなに良いか」

そんな、兄の呟きが私の鼓膜にこだました。

「ドロシーは、【プリメラの加護】妖精プリメラ、人のすぐ傍で生活し、たまに悪戯していく、主に家事などが得意となる加護だ」

まあ、マリアも同じ加護がついているはずだし、それはあまりおかしくない。

次は双子ちゃんだね。

「クレアには、【魔王の同化】」

「サクラには、【勇者の浄化】」

「そして、二人とも【転生神の寵愛】がついている」

そういつてから、魔法を解くと啞然とする三人の顔を見回す。多分、私も兄さん達と同じ表情をしていると思う。

「ねえ、兄さん、なにやったの？」

とりあえず、【転生神の寵愛】は置いとくとしても、残りの二つが意味不明だ。

この子達は、何をしたらこんなめちゃくちやの状態で生まれてくるのだろう。

そう思いながら、絶句している三人に最後のとどめを刺した。

「あと、私の力では読み取れないものが何個かあった気がする」

「「「つまり？」」」

「あの子達の加護は、これだけじゃないってこと」

私達四人の、表情は彼らが着替えて来るまではれる事は無かった。

お客さんと、露見した片鱗（後書き）

だんだん、大人たちに気づかれ始めております。
まあ、いいですが。

感想誤字脱字などがありましたら書き込んでいただけると嬉しいで
す。

ありすぎて指摘できないよ、という方、チヨコチヨコ治していくつ
もりなので根気強くお付き合いください。

三歳からはじめる、ギルドの依頼（前書き）

某書籍風に、ってかんじで、三十歳でも保健体育でもありませんが。
三歳なのに、ギルドです。

三歳からはじめる、ギルドの依頼

- 妹よ

- はい、お兄様

- 今日は、稼ぐぞ

- 当たり前です

「チョット待て、その双子、まだ依頼を受けてないし、お前ら三歳組はギルド登録もしないといけないんだ、おとなしく座って待っている」

さっさと行こうとしていた俺達に、カルマからストップが入った。何だ、何だ、ちよっと年が上だからって生意気だぞ。

「クレア、お前今結構失礼な事考えているだろ」

と、いうカルマは置いておいて。

なぜ、いきなりギルドなのか不思議な方もいるだろうから説明しとこう。

まあ、ギルドの説明は軽く、この大陸の格貿易主要都市に存在し雑多な依頼をこなしていくのがギルドだ。

細かく分ければ、商業ギルド【カンパニー】鍛冶ギルド【アルテミス】冒険者ギルド【ラグーン】などいろいろあるのだが、三歳の俺にはギルドと覚えておけば十分だって気がする。

さて、ここでなぜ貿易都市ではない、このフラグレス村にギルドがあるのか不思議な人もいるだろう。

まあ、簡単に言えばここが冒険者の村だからだ、引退していろいろが腐っても元高名な冒険者がたくさんいるし根無し草だった冒険者が拠点としてこの村を使うのも珍しくない。

そのため、この村にはギルドがあるし、この村の子供達はそのギルドを使って小遣い稼ぎをしているのである。

まあ、この村に来る依頼は、村の中から俺達のような子供のために簡単な依頼が来るか、外から凶悪な依頼が来るかのどちらかなので中堅者の冒険者はあまり近づかなかったりするのだが。

「おーい、クレア、サクラ、アルマ、さつさと来い登録を済ませるぞ」

おや、カルマが呼びだ、しょうがねーな、いつてやるか。

「それでは、この水晶の上に手を置いてください、ちょっと痛いので我慢してね」

「ふえ、痛いの、や」

最初のアルマ、いやー、そのビクビクオドオドかわいね。おにーさん悶えちゃうよ。

あれ、受付のおねーさんがその様子を見ながらハアハアしてるんだが大丈夫なのか。

いつも、この瞬間はたまらないわ、っておい。

「おし、次クレア」

ぐずっているアルマの頭をなでながら、カルマが俺を指定。

はい、こちらですよー、と、なんとなくいやな笑みを浮かべている

おねーさんの前まで歩いてく。

まあ、そのせいでちよつと緊張していた俺にはその気配を気づくことができなかったんだ。

「じゃあ、おねがいしま「てやー」」

「え？」

いきなり、妹の思考と直結したと思えば水晶のうえにはもうひとつ見慣れた小さな手がおかれたいた。

「ち、ちよつとシルク姉さん？」

戸惑う、俺とサクラを置き去りにして発動しかけていた水晶がフル稼働。俺達の身体を生態電流の波が駆け抜ける、確かにこれはかなり痛い、足のつま先から頭のとっぺんまで静電気がかけ抜けていくと言えばいいか。

「はい、終わりました」

どこか、あきれた様子のおねーさんが二人分のギルドカードを渡してくる。

「ところで、君達、二人ががりつて言うイレギュラーがあつたとはいえ、三歳で称号もちとか化け物ですか」

渡ししながら、そつと俺達の耳元に話かけて来るおねーさん、まあ、ほかの人には黙つといてあげるよ。

つて、いい笑顔で水晶をしまいはじめた。

俺達は、なんとなくいやな予感を覚えつつも自分のカードに魔力を流してみた。

クレア 【魔天の片翼】

サクラ 【聖女の片翼】

ああ、確かに二人で水晶にてをおりたりしなければ、きっと出なかったですね。

いまさら、遅いと思いながらも、俺達は絶対誰にもカードを見せないと心に決めたのであった。

「おーし、じゃあ、皆カード持ったし依頼受けるか」

「今日の、お小遣い依頼は、お祭りの材料集めでしたっけ」

「あはは、まさか成功するとは、二人ともごめんねー」

一人笑い転げているシルクを除いて、話を進めていく年長組の二人。

「なら、シルクとカルマ君がいますし、ほかの子は特に武器なしでもいいですね」

「ああ、ちゃんと守るから任せておけ」

なかなか、頼もしいカルマに笑いかけるとドロシーが、みんなに号令をかけた。

「じゃあ、みんな【祭りの材料集め 子供の分】の依頼に出発するよ、いいかなー？」

「「「「はい!」」」」

こうして俺達は、ギルドを後にした、目指すは「祭りの材料集め
子供の分」、なげーよ。

歩き出しながら、俺はふと思った。

- なあ、妹よ

- はい、お兄様

- 俺達、称号逆じゃね？

- いまさらですよ、お兄様

子供の集団の最後尾、妹のため息が静かに虚空に消えていった。

三歳からはじめる、ギルドの依頼（後書き）

はい、まあ、無茶振りはわかっていますよ。
でも、今書きたかったんですもの。

感想誤字脱視を書き込んでいただけると嬉しいです。

探索する子供達と、どこか不幸な双子（前書き）

PVが10000、ユニーク1400を越えました皆様ありがとうございます。

今回は初めての依頼続きです。

探索する子供達と、どこか不幸な双子

「クレスー、これは使えるかな」

「シルク姉さん、マタビなんて持ってきてどうするんですか」

「クレス、こちらは使えるかしら」

「フレスそれはシルフィの効用草だね、これは依頼よりも普通に売ったほうがいいと思うよ」

「クレス、櫛の木はこんなもんでいいか？」

「カルマ兄、この系統の依頼受けてるの、今年はぼく達だけだろうから多めに持っていていったほうがいいんじゃないかな」

「クレス君、紅茶はいかが？」

「ああ、ありがとうございますドロシー姉さん」

これは、ぼくらの依頼の光景である。

普段は、内向的なクレスだが、薬草などの植物の知識においては大人顔負けであるようだ。

- 妹よ

- はい、お兄様

- 出番が無いな

「はい、お兄様（泣）」

妹も、心の中で泣いているようだ。

さてと、「冗談はこの辺にしておいて、俺達も仕事をしていくか、これもお小遣いのためだしな。」

と、俺はすぐ近くに群生していた薬草らしき物をせっせと集めはじめる。

ちなみに、お祭りに薬草が必要な理由はただひとつ、酔いざましだ。可愛い、妹もとてとて木の枝を拾い始めた。

「クレス兄さん」

「どうした、クレア」

普段と違って、珍しく笑顔のクレスがこっちを向いた。

「この、薬草みたいなのは使えるかな？」

「どれどれ」

そして、知識の海の中から、俺のもって来た草を探し始めるクレス。

「なあ、クレア」

「うん？どうしたのクレス兄さん」

「君は、酔っ払った大人を虐殺したいのかい？」

「へ？」

こちらと、毛頭そんな気持ちはなく、はてなと首を傾げる俺。

クレスも、三歳だからな、と、呟いてから俺のもって来た薬草らしきものの説明をしてくれた。

「これは、アンジャツシユの香り草っていつてね、この草の成分を注質したら、すごくいい香りの香水ができるんだ」

「ふむふむ」

なんだ、とってもいいものじゃないか。

「ただね、こういうわけなのはわかんないんだけど、薬草と混ぜるとものすごい毒素を排出するんだそうだ・・・」

「ごめんなさい」

うん、わかればいいんだ売れば結構いい値段になるしね、俺を攻めるわけでなく、のんびりと解説してくれたクレスなのだった。ただ、その余裕が続くのは数秒後までだったのだが。

「クレス兄様、枝を集め終わりました」

「うん、ありがとうサク、・・・サクラさん」

「はい、どうしましたか」

はい、妹が何かやらかしましたか。

「いや、君ら二人とも狙ってもってきてるんじゃないよね」

「「はい？」」

なにを、言っているんだ、俺もこれ以上毒草になつてしまうものを集めるわけにはいかづ、サクラの手伝いをしていただけなのだが。

「まず、サクラ」

「はい」

「君が集めてきたのは、大半が香り木と呼ばれるものなんだ」

「はあ、いいにおいがするのですか」

心底いやそうに、サクラの質問にクレスは答えてくれた。

「ドリアード枯れ枝と呼ばれるものでね、一般にお香などに使うものなんだけど、そのにおいの効果がね．．．．．気持ちよくなることなんだそうだ」

子供達の中には首をかしげているものもいたが、主に耳年間なドロシーとフレスが、真っ赤な顔をしている。

三歳で精神的に幼児退行していても、知識は残っているためその言葉にすぐ思いあたったサクラは、ものすごい勢いで集めた枝をぶん投げていた。

「で、次にそこで笑っているクレス」

「うん、ぼくが何か」

「君が集めているカリンの枝はね」

「うん」

「．．．．．燃えないんだ」

今回の依頼、酔い覚ましよの薬草を集めること・祭りで使用する薪を集めること。

意味無いじゃん、カリンの枝！！！！

その後、顔を真っ赤にして枝を投げる幼女と、どこか悲しげに枝を投げる男の子姿が見られる、不思議な光景があったそう。

探索する子供達と、どこか不幸な双子（後書き）

もうちょっと、後お祭りの説明で三歳編が終わります。
次は、五歳編を書いていこうと思っています。

誤字脱字感想ご意見などお待ちしております

依頼完了？不幸が続く双子（前書き）

依頼終了、今回は換金します。

依頼完了？不幸が続く双子

「シルフィの効用草は、フレスちゃんですね、五枚一束で四束あるので銅貨40枚ですね」

「ありがとうございますわ、アクア姉様」

「えーと、次はカルマ君、櫨の枝五十本つと、これは依頼品ですねカルマ君の報酬にちよつと色をつけときますよ」

「うん、ありがとう」

「ドロシーちゃんと、アルマちゃんがそれぞれ眠り草を五束づつ、うん、これで今回の依頼は達成ですね」

「「はい（．．．は．．．い）」」

「えーと、後はシルクちゃんのマタビ三束とクレス君のマリスの野苺、シルフィの毒消し草ですね」

「「はい（はいなー）」」

「シルクちゃんは、マタビの代金銅貨10枚、クレス君は合計して銅貨50枚です」

「「ありがとうございます」」

「えー．．．と、最後に双子ちゃん」

「・・・・・・・・はい」

「どこで拾ってきたのこれ？」

「・・・・・・・・森で」

「あの森にこんな凶悪な植物、原生していなかったと思うんだけど」

「・・・・・・・・」

俺達が、カリンの枝とドリアド枯れ枝を捨てた後、事態は悪化の一步をたどった。

あの後、数回同じことを繰り返して、最終的に持って帰ってきたのは。

サクラ 人面樹の右腕？、呪怨樹の根っこ、妖狐の紅梅香の枯れ枝

クレア 櫨の枝（水精霊憑き）、宝樹の枝（対火耐性）、カリンの枝（不燃物）

カリンの枝はいつの間にか紛れ込んでいた、何かもう呪われてんじやねとしか言いようが無いほど、散々な結果だった。

さすがに、呪怨樹の根っこなどはサクラも捨てる気にはなれなかったようで、しょうがないのもって帰ってきたというわけだ。

クレスなんて、最後のほうは呆れ通り越して顔引きつってたし。

「まあ、君達がうなだれているわけもなんとなくわかるんだけど、

報奨金は君達が一番多いよ」

アクアさん、慰めてくれるのは嬉しいけど俺達は普通に依頼をこなしたかったです。

「クレア君は、金貨1枚、サクラちゃんは銀貨30枚だね」

ちなみに、お金は、玉貨・銅貨・銀貨・金貨・白金貨・幻想貨とあり、価値的には玉貨が100枚で銅貨になり、それぞれ100枚づつ次の貨幣に繰り上がるようになっている。

普通の一般人が一日に稼ぐのが大体銀貨一枚といわれているため、俺達は三歳なのに一日でその30倍と100倍の金を稼いだことになる。

のだが、俺達は落ち込み続けていた。

- なあ、妹よ

- はい、・・・お兄様

- 俺達に、普通の生活というものは満喫できないんだろうか？

- 私も、それが言いたいです。

俺達はとっても悲しくなった、酔い覚ましと薪をとりについたはずなのに、もって帰ってこれたのは呪われた枝と不燃物のみ、くそ女神さま俺達に平穏は無いのか？

「ええと、双子ちゃんとアルマちゃんは今日が初日でしたね、これは初依頼成功のプレゼントです」

気を使って、くれたのかアクアさんが、受付の中から小さなポーチのようなものをこそそと取り出す、いまさらかもしれないが、アクアさんは、俺達の登録の時に苦痛の表情を恍惚とした表情で見ていたおねーさんだ。

「……はい……ありがとう……ございます」

くしくも、普段どおりのアルマちゃんと、落ち込んでいる俺達のしやべり方は完全に同じだった。

アクアさんもさすがに引きつった表情で俺達、一人一人にそのポーチを優しく渡してくれた。

「それじゃあ、みんなこれからがんばってね」

「……はい！（……はい）」

その返事とともに、俺達はギルドから帰還した、俺達の金は多過ぎたから、みんなと分けようと思ったんだけど、自分がとったものは自分のお金とするべし、と断られてしまった。

これが俺達の初依頼、依頼の報酬は人数分で銅貨160枚だったのに、俺達双子の換金して得たお金は銅貨13000枚分だった。

・とりあえず神様、三歳でこんなにお金是要らないんだが

・激しく同意です、お兄様

・まあ、いいだろう明日からはお祭りだし、お金を使う機会もあるだろう

・ええ、そうですね、お兄様

そう思念を飛ばしてから、お金をとりあえず入れておいたポーチを、腰のベルトにくくりつける、サクラはいつもどおり母上様の趣味のゴスロリ姿なのでサクラの、ポーチも一緒にくくりつけた。

金貨銀貨130枚はいつているのに、そのポーチはまったく重みを感じさせなかった。

満足げに、うなずいて歩き出す。

このお金は、お祭りの間にすべて使い切つてやるという決意を、二人分、小さい胸に抱いた俺達はゆっくりと帰路に着いた。

ぼく達は、知らなかったんだ、お祭りで必要とするお金は、多くても今日フレスたちが稼いだ程度なんだってことを。

依頼完了？不幸が続く双子（後書き）

クレアがあんなに報酬が多かったわけは宝珠の枝（笑）です。

なぜ、子供が行くような森にそんなものが？不幸属性じゃないでしょうか。

まあ、簡単に言えば二人にはそういう類の祝福もついている（憑いている？）ってことです。

神の祝福がついている時点でラックは人より上ですから（笑）。

感想誤字脱字ご意見などありましたら書き込みお願いいたします。

次回からはお祭り編になる予定です。

三話くらいかなー

春の始まりのお祭り（前書き）

年齢のところで、修行期間を一年から二年に変更いたしました。

春の始まりのお祭り

新年祭、その名のとおり、新しい年を祝うお祭りであり、いろいろな意味を持つお祭りでもある。

まず、ひとつ、このお祭りの時に生まれた日は関係なく、全員がひとつ年をとる。

この世界では、誕生日という概念はあまり無く、その日に皆、年をひとつ重ねるのだ。

つまり、このお祭りが、終わったとき俺達は、四歳になるというわけだ。

そして、この新年祭は別れの祭りでもある、そう、村の人々にとっても、俺達にとっても。

まず村単位で言えば、お祭りが終わった時十一歳になった子供達が、それぞれ、学校に旅立って行く。

そして、九歳になった子供達は、村の大人一人に従事して、十一歳になるまでの二年間いろいろな勉強をするのがこのフラグレス村の決まりだった。

つまり、見知ったところで言えば、シルクとカルマがお祭りの後から、子供達から離れ、冒険者達について修行期間に入るというわけだ。

ドロシーは？って、マリアさんについて家事の勉強をするらしいからいままでおりだ。

しかし、このような別れがあればこの祭りは出会いの祭りでもある、引退した冒険者や、腰を落ち着けた冒険者が大体この時期を狙って流れてくるといふこともあるが。

今年生まれた子供達、つまりこのお祭りで一歳になる子供達のお披露目といった側面もこのお祭りは持っているという理由もある。

アイウスとキャシーの二人組は、お祭りが終わったらまた旅だつらしく、せつかく仲良くなれたのに残念と行った気持ちもあるが、今は新しくくる年を祝うことが先決だ。

ちなみに、この世界、一年の流れとしては、春の季節、夏の季節、秋の季節、冬の季節があり一期がそれぞれ90日、一年で360日となっている。

場所によっては、それぞれ季節ごとのお祭りがある地域などもあるらしいのだが、このフレグラス村が大々的に祝っているのがこの新年祭であった。

- 妹よ

- はい、お兄様

- 財布は持ったか

- はい、新しく買ったベルトにポーチもくくりつけてあります。

そういうサクラの今日の格好は、いつのどおりのゴスロリドレスに、腰におしゃれな黒のベルトバックルを締め、ギルドで買ったポーチをくくりて、といった完全？装備である。

「さて、いざ行かん、俺達の戦場に

「ええ、お兄様、わかっていますわ

この貰いすぎたお金を使い切る。

そう胸に決意した俺達は、それぞれ顔をあわすとニコリと微笑みあう。

さあ、決戦の始まりだ。

ガチャ、と、決意を胸に闘志を燃やしている俺達の部屋にドロシーが入室してくる。

そして、俺達の顔を見て怪訝な表情をすると。

「クレア様、サクラ様、お祭りは明日からでございますよ、今日はもうお眠りになってくださいませ」

そう、優しく俺達に忠告してくれた。

ああ、そうさ、知っているよ。

誰が、いまからお祭りだって言ったよ、ただ、何か興奮して眠れなかったんだよ。

「ああ、わかった」

「わかりましたわ、ドロシー」

とりあえず、そういつて、布団に入る俺と、自分の部屋に戻るサラ。

そして、ドロシーが部屋の明かりを消して自分も寝に戻った後も、しばらく屋敷の中を子供二人の思念が飛び交っていたそうなの。

「あしたが、楽しみだな妹よ」

「ええ、そうですね、お兄様」

その思念だけは、年相応の感情を持ってフヨフヨと夜の闇に消えていった。

春の始まりのお祭り（後書き）

はい、次から本格的にお祭り編、かけるのかな？微妙です。

誤字脱字感想ご意見などありましたらどしどし書き込んでくださいませ。

お待ちしております。

少女のお買い物（前書き）

お祭り、何とかかけているでしょうか、といっても。
背景表現なんてこれポツチもしていない自身がありますが。

少女のお買い物

新年祭、喧騒の中、露天を出している冒険者らしき青年の前で、小さな少女がじつとひとつの商品を凝視していた。

じーーーーーっ

「お、お嬢ちゃん？、これに興味があるのか？」

じーーーーーっ

コクコク

首を縦に振っている目の前のお嬢さん、確かこの領地の領主であるクォーツ様の娘だったはずだ、その彼女がなぜか、私が珍しいからと持ってきた商品をじつと凝視している。

深遠祭で、その商品、多分魔道具なのだろうが、を売ってしまおうともってきたが、食いついてきたのがまさか、こんな小さなお嬢さんだとは、と内心苦笑しながらも、いままで、この道具を使いこなせる者はいなかったし、貴族の娘だしこの少女になら売ってもいいかなとなんとなく考えてみる。

「売ってやつてもいいが、結構高いぞ」

「いくらですか？」

「ふむ、金貨一枚、いや、お嬢ちゃんにはおまけして、銀貨三十枚でどうだ」

まあ、腐っても魔道具だしな、がんばってまけてもこれが限界だな。ま、こんな小さいこの子が手が出る値段ではないだろ、と、たかをくくりながら、私は赤字覚悟な値段を提示する。

「はい、わかりました」

と、少女は、腰のベルトにくくりつけたポーチをこそこそとあさりだす。

ははは、自分の宝物でも出すのかな？など、その年齢に沿った行動を期待していた俺に、

「はい、銀貨三十枚です」

その少女は、ちゃんと使える銀貨三十枚を俺の目の前に出した。

「へ？」

「どうしたのですか、足りると思うのですが？」

その、予想外の行動に呆けてしまった、俺はしばらくして、相手が貴族のお嬢様だってことを思い出す。

さすが、お嬢様、普通の平民の月収の三十倍をぼんと出すとは。

「ああ、お小遣いかい？」

「いいえ、違います」

お小遣いじゃない？じゃあ、なんだ、すでにその年で、祖父が誰かの遺産でも継いでいるのか。

そんな疑問を浮かべている俺に、彼女はその答えを出してくれた。

「ここは、冒険者の村ですから、自分で稼いだお金です」

そういつて、お金を俺の前に置くと、俺が売りに出していた魔道具の腕輪をその少女は楽しそうに腕にはめはじめた。

「さすがだな」

流石冒険者の村、たとえ貴族令嬢だろうと、たとえ五歳にも満たない幼子だろうと、その一人一人に冒険者の血が流れているというわけか。

「はい、ありがとうございます」

俺に対してそう一礼すると、少女は彼女の兄らしい子供の元へ、楽しそうにかけていった。

その表情は、歳相応の可愛らしいものだったが。

「まさか、買われてしまうとな、な」

走りさる少女の小さな背中に、俺の眩きだけが追っかけていった。

「何を買ったんだサクラ？」

- 結構、強力な魔道具のようだな？それは

「腕輪ですわ、兄さん」

- ええ、魔力を流すことによって、自分の属性武器になる特殊な魔道具のようです

「似合っているよ、サクラ」

- そうか、良く手持ち金だけで買うことができたな

「ありがとうございます、兄さん」

- ええ、もちろん魅了も使いましたが、相手が子供と侮ってくれたことと、何より、いままで、まともに使いこなせる人がいなかったのではないかと

表面上は、とても可愛らしい笑顔を浮かべる妹、俺にとっても、サクラがこれから生きていく中で、サクラに合った武器は必要だと考えていたので、この段階で、その候補ができたことは大変喜ばしいことだった。

「綺麗な、装飾だね」

装飾、いやその刻まれた魔法陣こそが、この腕輪の本質なのだろう。

- 発動させなくても、武器形態はどんな物かわかりそうか？

「うん、よくわからないけどねー」

・無理ですね、最低でも、魔法陣を探るには微量の魔力の行使が必要でしょうから

「どんな、意味か今度しらべてみるか？」

・なら、それは今度にしておくか

「はい、兄さん」

・ええ、そうですね、お兄様

ふむ、あとは、この魔道具が、少しでもサクラの身の守りになることを祈るのみだな。

さて、俺はどうやってこのお金を使いきるつか。

早々と、手持ち金を使い切ってしまった妹を見ながら、兄はそう悩み始めた。

少女のお買い物（後書き）

とりあえず、サクラが一步前進です。

体力馬鹿なクレアと違い、一般人まで身体能力が落ちてしまったサクラには、それなりの武器をあげたかったので。

誤字脱字感想ご意見などありましたら、感想のほうに書き込みお願いいたします。

少年のお買い物（前書き）

ちよつと、グダグダになってしまった感じが。
そのうち直すかもしれません。

少年のお買い物

「うーん、これか？いや、こっちの方が」

新年祭の露店のひとつ、恰幅の良い店主の前で、一人の少年が品物の前に座り込んで、うんうんうなっていた。

「お坊ちゃん」

「うん、どうした店主」

何なんだろう、この子供は私の商品に興味を持ってくれたのは嬉しいのだが、そこに座り込まれてしまつては、ほかのお客さんが寄り付いてこん、何とかならんか。

「小物類をさつきからごらんになっているようですが、どなたかにプレゼントでしょうか？」

「ああ、そうなんだ」

「お相手は、どのような方ですか」

「うむ、友達なのだ、男達の方は、すぐ決まつたんだが、女性のほうがなかなか決まらなくてな」

同世代のお友達の送るようですね、ふむ、見たところお金はちゃんと持っているようですし、適当なものでも売りつけてやりましょうか。

「ちなみに、男性の方達になにを差し上げるか伺っても？」

「うむ？ああ、父上に『ハイデル公爵のストーカー日記』を、カルマに『馬鹿でもわかるラブレターの書き方』、クレスに『シルフィの上級薬草学』をあげようと思っている」

「.....」

この、坊ちゃんのお父上とカルマと言う少年がどんな人かは、わかりませんが、何かうらみでも買ったんでしょうか。

「あら、クレア君じゃない、お買い物かなー」

二人の男性の心配をしていた私の耳に聞こえてきたのは、艶やかな声、目を向けるとそこには、白磁のような肌を朱に染めた、美しいエルフの女性が、さっきまで、品物を眺めていた少年の後ろから、抱きかかえるように少年に乗りかかっているのが見えた。

「やめてください、アイウスさん、酒臭いですよ」

へ、アイウス、いまこの少年はこの美しいエルフの女性のことをアイウスと読んだか？

「いいじゃない、堅いこと言わずにさー、おねーさんが一緒に選んであげるよー」

「む、それなら.....」

と、坊ちゃんが悩んでいる間に、アイウスと呼ばれたエルフさんは楽しそうに品物を選び始めている。

「うーん、これかなー、ドロシーちゃんはやっぱりこれよねー」

「まだ、頼むとは、む、でもそれをドロシーにあげるのは賛成です」

「やっぱりー」

流されてるよ、流されてるよ坊ちゃん、そんな、商人の心の叫びに気づくはずも無く、アイウスと坊ちゃんは人数分、商品を選び終わったようだ。

「えーと、銀の髪飾り、ピンクのリボン、黒のカチューシャ、ユリシア草のブローチ、純銀のメリケンサック、シルバーネックレスですね、おまけして全部で銀貨50枚になります」

「えーと、一個多いのですが」

四人分のはずだったのにと、不思議そうな顔をしている坊ちゃん、そして、商品を包もうとした私の手の中からするとシルバーネックレスが引き抜かれる。

「授業料よ、クレアくん」

私の手から、抜き取ったシルバーネックレスを笑顔で、首にかけると、アイウスと呼ばれたエルフの女性は笑いながら立ち去った。

「・・・・・・・・・・」

「なにが、したいんでしょうねあの人は」

そういつて、坊ちゃんは一六個分の銀貨50枚を払つて、店から出て行く。

「アイウスつて、確かエルフの……………」

私の呟きは誰に聞かれることも無く、坊ちゃんが振り向くことも無かつた。

ふむ、シルバーネックレスと純銀のメリケンサックが一番高いんだが。

やりきれないものがあるな。

少年の心の声

悪乗りしたアイウスに買わされた母上へのプレゼントと、勝手に入られていたシルバーネックレスが

一番高かつたことを店主から聞いた少年の、悲しい声であつた。

少年のお買い物（後書き）

次で、お祭り編は終わると思います。
多分

誤字脱字感想ご意見がありましたら感想のほうに書き込んでいただけたら嬉です。

三歳、最後の日（前書き）

えと、四歳になります。

三歳、最後の日

「はい、アルマ、ユリシア草のブローチだよ」

「ひ、ひゃい、えと．．．ありがと．．．う．．．ごぞいま．．．
す、いや．．．、ありがとごぞいまひゅ」

なぜ、言いなおしたんだろう、結局噛んでるしね。

いやーアルマは可愛いなー。

「これは、フレス姉さんに」

そういつて、顔を赤くして固まっている、フレスにピンク色のリボンを渡す。

「あ、ありがとございますわ、クレア君」

返事も、そこそこにプイツと後ろを向いてしまった。

「こ、これは、プロポーズ？いえ、でも、相手はまだ三歳なんですよ．．．」

何か、ぶつぶつ言っているが、後ろを向いてしまっているのだから聞けない。

髪につけたところも見たかったんだけどなー。

「で、これはクレス兄さん」

とりあえず、フレスはおいておいて、クレスに『シルフィの高級薬草学』を渡す。

「いいのかい？　こんないいものいただいてしまつて」

「うん、依頼の時間にお世話になつたし、あの時見せてくれた知識をもっと伸ばしてほしいくてさ」

「きみは、時々本当に三歳かわからなくなるね」

そういつて、俺から『シルフィの高級薬草学』を受け取つたクレスは、普段見せない嬉しそうな表情だつた。

「それで、これはカルマ兄につと」

「……………クレア、俺に何かうらみでもあるのか」

そういつて、俺が差し出した『ハイデル公爵のストーカー日記』を前に硬直したカルマ、

「あ、ごめんカルマ兄、間違えた、こつちだこつち」

まあ、わざとだな。

「これは、これで複雑な気分なんだが」

俺から、ちゃんとしたプレゼント『馬鹿でもわかるラブレターの書き方』をしぶしぶ受け取るカルマ。

まあ、いいこれでドロシーに成功するなら、何かふざけたことを言

っておいでなので。

「あ、そうだ、店主さんが言ってたんだけどね」

「うん、店主がどうかしたのか」

「その本、ラブレターの書き方が書いてあるだけで、成功するかどうかは、その人の努力しだいだってさ」

ぴしつと音が鳴りそうなくらい見事な硬直です、カルマさん。

ナイス、リアクション。

「はい、サクラ」

石になっているカルマを無視して、サクラの頭に黒のカチューシャを優しくつけてやる。

「ありがとうございます、お兄様」

そういつて、サクラは嬉しそうに微笑んだ、のだが。

『お兄様？』

そんな、心の声が聞こえそうな視線が周りから、いたい、いたい。

その視線に気がついたのか、サクラははっと口元を押さえている。

・可愛いしぐさだけど、今更遅いぞ妹よ

「すみません、お兄様

さてと、後はドロシーと、父親と母上様だね。

「はい、ドロシーこれ」

「はい、ありがとうございますクレア様」

「つけてみてくれるかな、え．．．と、ドロシーの銀の髪に似合うかなって、思ったんだけど」

「はい」

優しく、微笑むと、ドロシーは銀系のようなその美しい髪に、銀の髪留めを絡めていく。

「はい、できました、似合っていますかクレア様」

その姿は、

「うん、とっても綺麗だよ、ドロシー」

綺麗過ぎて、俺はそんなありきたりな言葉しか言えない。

「はい、とっても綺麗な髪留めですね」

「え、いや、そういう「クレアくん」」

訂正しようとする、俺にシルクの声が割ってはいる。

「シルク姉、いまドロシーと話して」

「そんなことよりさー、私にはなにをくれるのかな？」

へ？そういえば俺が買ったものつて、本三冊、アクセサリー六つ、いま現在残っているのは『ハイデル公爵のストーカー日記』と純銀のメリケンサックのみ。

あはは、買うの忘れてた。

といえるわけも無く。

「シルク姉さんにはこれを」

と言って、『ハイデル公爵のストーカー日記』をその手に渡した俺だった。

子供達から離れ、一人酒をたしなんているエルフの女性、そこに、さつきまでからかっていた少年の母親が近づいてきた。

「アイエス」

「ん、どうしたのキャシー」

その返事のように、キャシーは握っていた銀のアクセサリーをいとおしそうに軽く握った。

「うちの、可愛い息子からプレゼントを貰ったんだ」

「ほんとうにー、よかったじゃん」

笑い上戸なのか、アイエスはこらえられないといった笑みをその口元に貼り付けている。

「うん、貰ったんだ、アイエスから、って純銀のメリケンサックを
．
」

「ぶつ．．．、へ、ちょっと、クレア君？、裏切ったの？」

そのときになって、アイエスは自分の酔いがさめていくことに気がついた。

まるで、自分の周りを渦巻くように流れている、懐かしき闘気、昔共にあったその懐かしい闘気を感じてアイエスは頬を引きつらせる。

「キャシー、キャシー？落ち着いて？闘気が駄々漏れになっているわよ．．．」

「誰の．．．、誰のせいと思っているんだー！ー！ー！」

一人の、女性の断末魔の悲鳴が、夜空に響きわたる、その光景は、息子からプレゼントが貰えなかった父親がとぼとぼと近づくまで終わらなかった。

エルフの悲鳴が聞こえる中、当の少年が暗い笑みを浮かべていた。

ふ、ざまあみる。

あんたのおかげで、泣き始めた父親がウザイ上に、シルクにあげたプレゼントのせいで、シルク以外から、流石にそれはひどくないかと冷たい視線を向けられたりと散々だったからな。

母上様に、黽られるといいわ！

と、さてと、そんなことより。

目の前で、新たな年を告げる鐘の音が響き渡る、その音を聞きながら少年は、

「これで、やっと四歳だ。

そう、感慨深く思っていた。

三歳、最後の日（後書き）

お祭り編終わりました、どこがお祭りやねんと言ったつっこみはなしの方向で。

それと、ドロシーをほめようとしたところ、クレアは悪くありません、作者が語彙不足だけです。

誤字脱字感想意見などありましたら感想のほうにお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6833y/>

最強のNPC共（仮）

2011年12月3日14時54分発行